
新しいスタートラインに立つ者は皆孤独

木樽 宗一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新しいスタートラインに立つ者は皆孤独

【Nコード】

N0297BA

【作者名】

木樽 宗一

【あらすじ】

かつて陸上競技を、走ることをこよなく愛した柊一。ただそんな好きという気持ちも無情な現実には、一年という歳月に埋もれてしまふ。本当は走りたいはずなのに・・・

きっとスポーツに限ったことじゃない。人に必要なのは、努力でも、才能でもなく、「情熱」なのだ。一人の若者が人生で見せた尊い一步の物語。

天気は、曇り。どんよりとした灰色の空と雲が今の柊一しゅういちにあまりにもふさわしくて、おかしくて、走り出すことがしばらくできない柊一も重い雲のようだった。

毎日飽きもせずに通っているのは走るのが好きだからというわけではなかった。健康やダイエットが目的というわけでもないし、それならばある程度の節制で事足りる。柊一が毎日、走っているのは、無心に走っている間だけは、頭にとりついて離れない陰鬱な思いを振り払うことができるからだった。

柊一はこの春に大学に入ったばかりだったが、真面目に講義を受けていたのは五月の半ばぐらいまでで、六月の末になった今ではキャンパスに顔をだすことさえなくなっていた。毎日、朝六時ごろに起き出すと、まずは、水だけ飲んで一時間ほど走る。そのあとシャワーや軽い食事を済ませ、陸上競技場でインターバル走やレペテンション、ペース走をして、それからカフェや図書館で夜まで時間を潰すという無気力な生活を送っている。郷里から遠く離れた土地で一人暮らしを始めたので、身近に親しい人間は一人もおらず、数日間誰とも口を利かないことも珍しくなかった。

いつも通っている陸上競技場は、代々木八幡から徒歩で十分ほどの場所にある。原宿（明治神宮前）からも来れるので、都心からのアクセスもよく、トラックの素材もタータンで走りやすいので、いつ行っても結構な人数がいた。

四百メートルのトラックで八レーンあり、柊一はいつも自分にある程度の負荷をかけるために、二、三レーンを使用している。おか

げで邪魔されることなく自由に走ることができた。

高校時代は陸上部に所属していたが、浪人していた一年間は、ほとんど走ることなかったせいで、初めのうちは、脳と身体が一致せず、フォームがたがたに崩れ、試しに測ったタイムは散々なものだった、今更大学の競走部に入るために頑張るわけではないのだから、タイムなどは気にせず心地よく走ればいい、と思いつつも、やはりただ漫然と走っているだけでは味気ない。一人では満足にフォームチェックもできないが、それでもかつての練習メニューを思い出しながら、少しずつタイムを縮めていった。

「随分とお速いですなあ」

突然そう声をかけられたのは、五千メートルで目標にしていたタイムに何とか到達し、ささやかな満足を覚えながらトラックの内側、えんえんと続く緑のフィールドで、芝生の匂いを感じながら遮るものが何もない空を見上げていたときだった。

声をかけてきたのは、ここ最近よく見かけるようになった老人だった。小柄で脂っ気が完全に抜け落ちた、思わず水をかけたくなるような身体をしている。年齢はどれくらいだろうか・・・六十以上であれば全て当てはまりそうだ。柊一は他の利用者のことなどほとんど気に留めたこともなかったが、この老人の存在だけははつきりと意識していた。異常なまでに遅かったからだ。

「はあ、どうも」

柊一は少し戸惑いながら曖昧に返事をした。他の利用者から話しかけられるには、これが初めてのことで、どういう態度で接すればいいのか分らなかった。

「どうして、そんなに速いんですかな?？」

「昔、陸上部に入っていたんで」

「なるほど、それであんなに力強く走れるわけですか」

老人は感心したように頷くと、そのまま柵一の隣に腰を下ろした。多少の煩わしさを感じないでもなかったが、褒められて悪い気はしない。自分の走りを強いと表現してくれたことも純粹にうれしかった。老人は怪しげな勧誘をするような人間にも見えなかったし、単に話し相手を欲しがっているだけなら、少しくらい付き合っただけようと思った。

「なんですか、何かうまく走れるコツでもあるのですか?？」

「コツ、ですか・・・」

「速く走ろうと思っても、思うように前に進まなくて、気づいたら疲れて歩いている人より、遅くなってしまっんです」

確かに、老人の言うことは冗談ではない。トラックの内側で休憩しているときに老人が練習している姿を何度も目にしていたが、あれは走るというよりも、空中で泳いでいる、いや溺れているようなものだった。もう少し遅ければ、誰も彼が走っているとは思わないだろう。

「それはきつと、身体に無駄な力が入りすぎているからですよ。もっとリラックスして、まずは、ゆっくり長くジョグをして自分のフォームを見つけてください」

「ほうほう、なるほど」

「最初から速く走れる人なんていませんよ」

「分かりました。それじゃあ、まずはジョグから」

老人は意気込んだ様子で立ち上がると、トラックの内側の芝生を黙々と走り始めました。

柘一はもう充分に休憩を取れていたが、果たして老人は実際のところどんな走りをしているのか気になり、その場でしばらく老人の練習を見守ることにした、

老人は、走りが跳ねてしまっていて、前に進んでいなかった。あれではすぐに疲れてしまう、案の定それで数分走っていたが、やがて背中が丸くなり始め、歩いているのか、走っているのか分らなくなってしまう。フォームはよくなるどころ、悪くなる一方で、最後には息をうまく吸えなかったのだらう。思いつきりむせだした。

見ていられなくなった柘一は、ストレッチをやめ老人のもとへ向かった。

「大丈夫ですか??」

背中をさすりながらそう言うと、老人は情けない表情で柘一を見上げた。

「昔は、もう少し速かったんですか」

それでも赤子に毛が生えた程度の速度だろうという言葉で柊一は必死に飲み込んだ。いや少し言った。

「脳と身体が一致していないのでしよう。もしかしたら接地の仕方、腿の引き上げ方の一つ一つを別々に練習するドリルのようなものや補強からやった方がいいのかもしれないね」

「今の状態では、どれだけ走っても無駄ということですか??」

そんな子犬のような目で見ないでください、何かとアンバランスですと心の中で呟く。いやまた少し言った。

「そうですね・・・今のフォームで走り続けても怪我をしてしまうだけです。というよりも、もし健康のために運動がしたいのなら、ウォーキングだけでも十分だと思いますよ」

「運動することが目的ではないんです。私はただ速く走れるようになりたいだけで」

ただ速く走りたい、そんな単純で純粹だけど力強い言葉に柊一の何かがうずく。

「うーん、だったら、まあー頑張ってください」

しかし柊一はそっけなく言い残し、老人の元を離れた。この調子では、いつまで経っても速く走れるようになれるとは思えないが、これ以上面倒を見なければならぬ義理もない。

他の利用客の邪魔にならないように、柊一は五レーンで二百メートルを三本流すように走った。その間、老人は教わったとおりに、

ずっとジョグをしている様子で、ときおりこつちをじつと見つめている気配も感じたが、気づかないふりをすることにした。

やがて全ての練習を終えると、柊一はロッカールームにあるシャワー室へ向かった。

熱いシャワーを浴びた後、日当たりの悪い汗臭いロッカールームで着替えながら、老人の言葉を思い出す。

「ただ速くなりたいか・・・」

思わず呟いて、変な感傷に浸っていることに驚く。そんな自分を振り払うように手早く着替えを済ませ柊一は玄関へと急いだ。

「やあ、先ほどはどうも」

競技場をでたところで背後から声をかけられた。振り返るとそこには先ほどの老人が立っていた。髪先から汗を垂らし、呼吸を乱しているところからすると、かなり慌てて柊一の後を追ってきたようだ。

「あれくらい別に気にしないでください」

柊一はさすがに迷惑に思い、適当にあしらって立ち去ろうとしたが、老人はすぐに追いつがってきた。

「もうお昼は済まされましたか」

「いえ、まだですけど・・・」

「でしたら、先ほどのお礼にぜひ何かご馳走させてください」

「いや、お礼なんて構いませんよ」

「そう言わずにぜひ。お若い方だからよく食べますでしょう??
どうです、カレーなんか?? 駅の近くに、私の知り合いが経験する
うまいカレー屋があるんです」

老人の言葉に柊一はぴたりと足を止めた。

柊一は昔からかなりのカレー好きだった。幼い頃の口癖は「カツカレー大!!」だったほどだし、夕食がカレーだとわかると狂喜乱舞して町内を何周も走ってくるくらいであった。高校の学食では必ずカツカレー大を注文するので、友達から「肉食系のインド人」と呼ばれていた。この町に越してきてからうまいカツカレー大に巡り合えたことがなく絶望の淵にいただけに、駅前にそんな店があるとは聞き捨てならなかった。

「どうです、その店の主人は若いころにインドに武者修行しに行っただけあって、それはもう絶品のカレーを出してくれるんですよ」

「カツ・・・カレー大・・・」

気づいたら幼い頃の自分が、今の自分に対して腹話術を使っているようにしゃべっていた。

「えっ、はい、カツカレーもあると思います」

その言葉を老人は了承の言葉と捉えたのだろう目を輝かせて柊一を見てくる。

「ええと・・・それじゃあご馳走になります」

柗一は口内に溢れた唾を飲み込んで言った。

「そうですか、よかったです。ではご案内しましょう」

老人は満面の笑みを浮かべると、柗一の先に立って歩き始めた。

その店は、駅から陸上競技場に向かう方面とは、逆方向に数分歩いた高架下にあつた。電車が来るたびに揺れる店は今にも崩れそうで、まるで取り壊し中のようなつた。ただもう昼時は過ぎたというのに入口の外には客が二、三人並んでいる。その最後尾についた柗一は、また違った意味で唾を呑んだ。

「見た目は悪いですけど味は絶品ですよ」

そういう表情をしていたのだろう、すかさず老人のフォローが入る。

「はあ・・・」

そう話しているうちに列は進み、十分ほど待つてようやく店内に入ることができた。

「やあ、久しぶり」

店内に案内されて奥のテーブルへ向かう途中、老人はカウンターの中へ声をかけた。

「おお、瀬田さんか。あんたが店に来てくれるなんて珍しい」

店の主人だろうか、白い調理服を着て腰には茶色のサロンを巻いている。老人とは対照的に恰幅が良く、若々しい。顔にはそれ相応の時代を感じさせるが、四十代と言われても納得してしまう。その年齢詐称の男性が爽やかな笑みを浮かべる。老人の名前は瀬田というらしい。

テーブルに着くと、瀬田はさっそくメニューを手に取り柊一目の前に広げた。

「カツカレーもあります、何でも好きなものを頼んでください」

手書きのメニューに記された品数はあまり多くはなかった。しかし、それがかえってカレー専門店として味にこだわっている証に思えて好感を覚える。

せっかくなのでじっくりメニューを眺めた後にカツカレー大（大なんてなかったが）を注文しようとした柊一は、ふと値段に目をやっつて声を詰まらせた。二千円もしたからだ。一番安いシンプルカレーでさえ千四百円する。ただジョグをしたらとアドバイスしたくらいで、こんなご馳走をしてもらっていいのだろうか。

「あ……本当に頼んでいいんですか？」

「どうぞ遠慮なく」

「じゃあ、カツカレーだ……を」

柊一が遠慮がちに言うと、瀬田はすぐに店員を呼んで注文した。

瀬田自身は、少なめに盛ってくれ、と指示をして野菜カレーを頼む。

店員が立ち去った後、柊一は落ち着かない気分で瀬田と向かい合った。本当にこれは、ただのお礼と考えていいのだろうか。

「そうだ、お兄さんの名前を聞いても構いませんか？」

ふと思いついたように瀬田は言った。

「あつ、村山って言います」

「ほうほう。村山さんは、見たところ学生さんのようですが」

「ええ、大学生です」

「どちらの学校へ通われているのですか？」

その質問に、柊一は自分の表情がこ強張るのを感じた。

「・・・早稲田です」

「それはすごい！！もしかして競走部の方ですか？」

「それは、違います」

硬い声でぼつりと答える。

触れてはいけない箇所だと察したらしく、そうですか、と瀬田は頷いてそれ以上踏み込んだ質問はしてこなかった。

実際のところ、柊一は高校時代の陸上記録は一切ない。記録が伸び始めた高二の春に、部内で暴力事件が起きた。嫉妬、よくある話だ。記録がすごい勢いで伸び始めた柊一に恐れをなしたのだろう。黒い闘志を燃やした先輩部員の何人かが潰しにきた。ただ柊一はその被害を直接は被っていない。その前にそいつら全員を殴り倒した奴がいたのだ。事実を知ったのは事件後しばらくしてからで、その時はただ陸上部が廃部になるという現実だけがあった。それでも練習はやめず、柊一は、ひた走った。いつか陸上部が復活することを信じて。その日はついに訪れず、あっけなく高校生活は終わった。

だから早稲田を目指した。記録は関係なく入部することができると聞いたからだ。本当はそんなことはなく、入部テストすら受けさせてもらえなかった。

それでも入学した当初は、サークルで記録を残せば、と多少の希望を持っていたのだが、一年間のブランクは柊一が積み上げてきた努力を全て崩していた。そして努力よりも才能よりも決定的なものになくなっていった。それは陸上に対する「情熱」。きつと「情熱」を保ち続けること、それが一番難しい。どんなにつらい練習にも耐え、さらなる速さを、高みを目指す強い意志が、なぜかぼつかりと穴があくように柊一の中から抜け落ちてしまっていた。

「走れない・・・」

そう呟いたことを覚えている。普通に走るのではなく本当の意味で走れなくなっていた。自分の中で何かが冷めていく恐怖を今でも覚えている。

「ところで、村山さんに折り入ってお願いがありました」

ふいに口調を改めて瀬田が言った。

「な、何でしょうか？」

いつの間にか遠く宙に浮いてしまった、自分の意識を捕まえ、やっぱりそうきたか、と柊一は警戒しながら応じる。

もし胡散臭そうな話の流れになってくれば、すぐに席を立つつもりだった。

「実は、明日から私に陸上を教え込んでもらえないかと思いましたが」

瀬田はわずかに身を乗り出し、真剣な眼差しで柊一を見つめた。

「教え込む、と言っても・・・」

他愛もない頼みだったことに内心でほっとしていたが、かといって決して喜んで引き受けたいようなことでもない。

「ご迷惑なのは重々承知しておりますが、村山さんほど走るのが達人な方なら、私のような鈍い者でも速く走れるようにする方法を教えてくださいるのではないかと、そう見込んでのお願いです」

「僕なんてただの素人ですよ。それよりどこかクラブチームみたいなところに入ったらどうですか？最近ではいいコーチが教えてくれるようなところもあるようです」

「そういうクラブチームとかジムだとかには通うわけにはいかないんです」

「どうしてです？」

柊一が尋ねると、瀬田は一瞬答えに詰まった。そして少し考えるような素振りを見せてから、

「・・・お恥ずかしい話ですが、年金で細々と生活している身なもので、そういったものの会費を払うだけの余裕がないですよ」

「そ、そうですか」

不用意な質問で瀬田に余計な恥をかかせてしまったことに、柊一は慌てた。きまりの悪さを誤魔化すために、グラスを手に取って水を口に含む。

「というわけで、どうでしょうか、私の先生になつたくれませんか？」

改めて瀬田が注文していたカレーが運ばれてきた。

柊一の前に置かれたカツカレー、すでにルーがかかっていたが、お好みに合わせて量が調節できるようにカレーポットもある。そのポットからは空腹を刺激する濃厚な香りが漂ってくる。もうそれだけで涎が垂れ落ちてきそうになったが、今すぐ食べたいという衝動を懸命に抑え込んだ。

もしこのカレーを食べてしまったら、瀬田の頼みを引き受けるしなくなるとは。もちろん、この食事はあくまで今日のお礼ということであって、今後の指導を引き受けるかどうかとは関係ないはずだが、安くない料理を奢ってもらっておいて肝心の頼みを突っ

ばねる、というような図太い神経は持ち合わせていなかった。

「さあ、どうぞ冷めないうちに食べてください」

柊一の内心の葛藤を知ってか知らずか、瀬田はそう言ってスプーンの入った籠を押し出してくる。

「・・・もし僕が教えたとしても、一週間やそこらで、速く走れるようになるわけじゃありませんよ」

「ええ、分っていますとも」

「今の状態では、かなり苦しい練習をしてもらうことになるかもしれない」

少し脅してみる。

「覚悟はできています」

瀬田はひるむ気配も見せず、柊一の目を見据えて、しっかりと頷く。

そんな命をも懸けんとする眼に柊一は一瞬、ひるんでしまう。だが違う、と心のどこかで何かが叫ぶ。あなたは思考と現実の境界線が曖昧になってしまっているんだ。現実を前にすれば、そんな覚悟はすぐ揺らぐ。あなたは走るということを知らない、わかっているんだ。覚悟なんて言葉認めない。

「あんな走りで、その年で速く走りたいうんですか??」

ひどいことを言っているのはわかる、でも止まらない。

「走ることをなめているんですか？走るってことは、ただ走ってるわけじゃない！！本当の意味での『強さ』、孤独と向き合い、どんなにづらい練習にも耐えられる、高みを目指す覚悟が必要なんです！！」

素人相手に何を言っているんだ。思わず恥ずかしくなって、柊一は席を立てて逃げだそうとした。

瀬田に背を向けた矢先

「私は本気です」

老人の声とは思えず振り返ってしまふ。口元は優しさを帯びているものの、目は笑っていない、怒っている。柊一は瀬田の怒りを感じた。立ったまま動けずにいる柊一に瀬田は続ける。

「歳などは関係がありません。スタートラインは自分で決めます。限界なら超えてみせます。現実なら変えてしまえばいいのです」

瀬田は自らの言葉に些かの疑いを持っていない様子だった。本物の覚悟を感じた。逆に教えて欲しいと思った。何があなたをそこまで動かしているのか。そのためにこの人とともに走ってみたい。

その時、二人のお腹が同時になってしまった。場の空気が一瞬で和んでしまい気づいたら口をついていた。

「いいでしょう。それじゃあ明日から陸上を教えてあげます、一緒に走りましょう」

柊一は迷いを吹っ切って、そう約束した。

「ありがとうございます、よろしく願いします」

瀬田は目を輝かせて頭を下げた。

腹の虫が鳴ってしまったものの、結局のところ、柊一の心を動かしたのは、目の前のカレーの魅力ではなく、瀬田の熱意、情熱だった。この一見すると枯れ果ててしまったような老人から、若者であるはずの柊一でさえ遠く及ばないほどの揺るぎない意志の力を感じる。その信念が困難な現実をどれだけ打ち破ることができるのか、純粹に知りたかった。

約束を交わしたことで、すっきりした気分になった柊一は、遠慮なくカレーに手をつけることにした。期待していたとおりカレーの味はまさに絶品だった。カツにいい具合にルウの味がしみ込んでいてとてもおいしい。それだけではない。

ソースのなめらかさといい、コクの深さといい、最高だった。カツだけではない、肉のうまみもたっぷり出ていて、箸ならぬスプーンが止まらなかった。

そして翌日から柊一の陸上指導が始まった。

まずは、トラックを軽く二周ほどし、軽くストレッチをする。それから普通柊一は二十分以上のジョグをするのだが、瀬田さんのために、まず補強、ドリルからやることにした。地味である。しかしこれをしっかりやるかやらないかで走りに余裕が生まれてくることは間違いない。足を浮かせ、膝を九十度に曲げてする腹筋や、右手

と左足、左手と右足を対応させてやる背筋。あとは体幹といったように、少し工夫はしてあるのだが、やはり退屈な筋トレである。少なからず何か言われることは覚悟していたのだが、瀬田は何一つ文句も言わずに黙々とこなしていた。

その後、毎日二時間ほど、ドリルや補強、次に四十分ほどジョグといったような基礎的な体力づくりのための練習を続けていった。自分の記憶だけを頼りに指導するのは心もとないので、柊一は図書館に行つて、いろいろ調べてもみた。

練習を開始して一週間が過ぎても、やはり瀬田の運動能力が衰えているせいか、あまり進歩は見られなかった。そこで柊一は五百ミリリットルの空のペットボトルを二本持ってきた。

「何に使つんですか？」

不思議そうに瀬田が尋ねてくる。

「これをですね・・・」

二本のペットボトルに水を入れながら答える。

「このペットボトルを持ちながら走るんです。そうすることで前傾姿勢、腿の引き上げ、腕の振りなどで使う筋力がバランス良く鍛えられるんです。今までの補強やドリルが生きていくるはずですよ」

「ほつほつ、なるほど」

本当はペットボトルではないのだが致し方ない。柊一にそんなお金はない。

・・・やはり地味である。トラックで練習している瀬田を見ていて思う。その瀬田を高校生だろうか、鮮やかに抜き去っていく。なんて広いストライド、まるで飛んでいるようだ。そして何より楽しそうだった。地球の重力なんてまるでないかのよう。

「……………」

自分の心のどこかにぶすぶすと燻っている火、もしくは燻りながら消えていく火のような心か。柊一の胸は高鳴り、そして締めつけられる。

未だに目に見える成長を見せない瀬田。それでも決して彼の熱意が衰えることはなく、柊一が指示する練習を地道に繰り返して続けた。ここから先は自分との闘いでしかない。

毎日決まった時間に陸上競技場へ行き、瀬田を指導するという新たな習慣が生まれはしたが、それ以外では柊一の生活は以前と同じままだった。今更キャンパスに足を運んで講義を受けたところで無駄としか思えなかったし、かといってきっぱり大学を辞めて新たな生活を求めようという気にもなれない。まるで時間を浪費するためだけに日々を送っているようなものだ。と自嘲しながらも、柊一は暇つぶしのできる場所に入り浸っていた。約束を交わしたときに感じた気持ちもまた冷めていくような気がして、せつない思いがまた頭を占める。

ようやく進歩の兆しが見えたのは、練習を開始して一カ月が過ぎた頃だった。

明らかにフォームが違っていた。多少のぎこちなさはあるもの、ちゃんとした走りになっている。つまり速くなっているのだ。

「すごいじゃないですか！」

柊一は急いで瀬田の元へはしっていき、祝福の言葉をかけた。

だが、トラック内側の芝生でうずくまるようにしている瀬田はひどく青ざめており、柊一の声に応じる余裕もない様子だった。胸に手を当てて懸命に呼吸を整えようとしている。単に無理な運動しすぎたわけではない、もっと深刻な異常が瀬田の身に起きているように見えた。

「だ、大丈夫ですか!？」

不安になった柊一が背中をなでようとする

「すみませんが、ロッカールームまで連れて行ってもらえませんか」

と瀬田は掠れた弱々しい声で言った。

柊一は頷くと、瀬田を抱きかかえるようにして、その顔色を窺いながらロッカールームへ連れて行った。

部屋に入ると、瀬田は自分のロッカールームからバックを取りだした。しばらく中を探ってから何か錠剤のようなものが詰まった小さなケースを抜き出す。一粒口に含むと、ベンチに腰を下ろして目を閉じ、長い間身動きをしなかった。

あまりにも苦しそうな表情に、柊一は声をかけることもためらわれ、その場でじっと見守っているしかなかった。以前にも、瀬田が蒼白な表情になり、トラックの内側にズレて静かに身体を横たえている姿を何度か見たことがある。しかし、これほど辛そうな状態になったのを見たのは初めてだ。

五、六分ほど過ぎた頃、ようやく瀬田の頬に血の気が戻ってきた。

「ご心配をおかけしました。もう大丈夫です」

瀬田は目を開けて、柊一の方を向いた。弟子が先生を敬うのは当然だからといって、瀬田はどんなときでも決して丁寧な口調を崩さうとはしなかった。

「瀬田さんはもしかして何か持病を抱えているのですか？」

「いや・・・まあ大したこともない病気です。たまにこうした軽い発作が起きるだけで」

「何という病気ですか？」

「きつとご存じない病名ですから、聞いたところで仕方ありませんよ」

瀬田は明らかに柊一の質問をはぐらかそうとしていた。しかし、その頑なな表情からすると、これ以上追及したところで無駄のように思えた。何しろ瀬田の意志の強さは、もう充分に思い知っているのだから。

「今度から、少しでも体調が悪いと感じた時は僕に知らせてくださいね」

気がかりではあったが、柊一としてはそう注意しておくしかなかった。

「気を遣ってもらってすみません」

瀬田は丁寧に頭を下げた。

気がかりと言えば、もう一つあった。毎日練習が終わって競技場を後にすると、瀬田は必ずあのカレー屋で何でも好きなものをご馳走してくれるのだが、初めのうちは素直に喜んでいた柊一も、やがてその食事代はどうやって工面しているのだろうかという疑問を覚えるようになっていた。食事の料金は安いものではなかったし、仮に店主と知り合いだということでも幾らか割り引いてもらっているとしても、それが毎日となればかなりの額になるだろう。いっそスポーツクラブに通った方が安くつくかもしれない。

もしかしたら、この食事の習慣が瀬田のつましい年金生活を圧迫しているのではないかと心配し、柊一は何度か誘いを断ろうとしたことがある。だがその度に、余計な遠慮はしないでくれという瀬田の一言に押し切られ、いつも店に連れて行かれることになっていた。

あるいは、年金で細々と生活をしているということ自体が嘘なのではないか、と思うこともあった。よくよく観察してみれば、瀬田が身につけている衣服は決してやすものではなかったし、会計の際にちらりとみた財布はかなりの厚みがあったからだ。

瀬田が本当はどんな人物なのか確かめてみたかったが、最初に柊

一が自分の内情を教えるのを拒んで以来、お互いの素性を探るのはタブーのような雰囲気になっていた。だから気心の知れた間柄になつてからも、柊一は瀬田がどこに住んでいるのかさえ知らなかったし、今になってその手の踏み込んだ質問をするのもためらわれた。

ともかく瀬田本人が気にするなと言っている以上は、柊一が経済的な心配をする必要はないのだと思うしかなかった。それに、とても自腹である店に通う余裕はないから、できるだけこの食事の習慣が続いてほしいと願うのも、柊一の本音であつた。

長かつた梅雨が明け、いよいよ夏が到来すると夏休みなのだろう、中学生や高校生が午前の早い時間帯から目立つようになってきた。速くなつたといつても、あの走る人の波には、今の瀬田では乗れないだろう。

仕方なく柊一たちは3000m障害で使われるハードル近くに座り、人気が引くまで、補強をしたり、ストレッチをすることにした。

「そういえば、瀬田さんは具体的にはどれくらい速くなりたいんですか？それともマラソンに挑戦したいとかですか？」

ふと思いついて柊一は尋ねてみた。

「そうですね・・・」

瀬田は遠い眼差しになると、しばらく考え込んだ。何か過去のことを思い出しているような表情を浮かべていたが、やがて

「あと一秒ですかね・・・」

「一秒？それは・・・」

「あつ、いえ、何でもありません」

瀬田はトラックに目を向けたまま、気恥ずかしそうな横顔を見せていた。その横顔はあまりにも遠くて、切なくて柊一は何も言うことができなかった。

それから夕方近くになって競技場が空いてくると、柊一たちはいつものように練習を始めた。

瀬田がついに目覚ましい成長を遂げたのは、その三日後だった。

四百メートルトラックのゴールで拳を握りしめながらじっと見守っていた。柊一は、瀬田がゴールした瞬間、一目散に駆け出して瀬田の元へと向かい、祝福の声をかけた。

「また一步前進ですね！！」

膝に手を当てて息を切らしている瀬田は苦しげに表情を歪めながらも、笑顔を作って応じてくれた。

と、そのとき、拍手の音が聞こえてきた。顔を上げると、いつも見かけるランナーたちが、みんな足を止めて瀬田に笑顔を向けていた。言葉を交わしたことはなくても、懸命に努力を続ける人間としての強さを、素晴らしさを、尊さを、この人たちは知っているのだろう。そしてその瀬田の努力を素直に認め、同じく祝福できている自分自身の変化に柊一は驚いた。瀬田は照れくさそうにぺこりと頭を下げた。

ささやかな祝福が済んでから

「すごいですよ、五千メートルをここにきて二十分を切るなんて」

と柊一は声を弾ませて言った。

「ありがとうございます、これも村山さんが指導して下さったおかげです」

瀬田は自身に満ちた笑顔でそう応じた。歩く人より遅かった一時期を考えると亀に翼が生えたような進化だ、進歩という言葉がふさわしくないくらい。

トラックの片隅で一休みした後、今の感覚を忘れたくないから、と言って瀬田は再びトラックへ走りに行った。

あまり無理をさせるのは心配だったが、顔色は良いし疲れた様子もないので、本人の好きなようにさせることにした。

それにしても、まさか本当にここまでやるとは思わなかった。この調子でいけば、どこまで成長できるのだろう。限界なら超えればいい、現実なら変えればいい、という言葉が柊一の頭の中に蘇る。瀬田はその言葉通り、自分の限界を、現実を変えた。

瀬田に敬意を覚えるのと同時に柊一が自己嫌悪を感じたのは、「情熱」が冷めていくことを理由に、自分が決めたこと、確かな胸の高鳴りを、走ることが好きという思いを確かに感じていたのに押し殺していたからだ。スポーツ推薦でないから授業が忙しいと、一人暮らしだからバイトをしなければいけない、ことあるごとに本格的な練習をする時間がないと逃げていた。

本当に走りたいたいという気持ちがあるのなら、親に土下座でも何でもして一人暮らしのお金を工面してもらえばいい。授業が忙しいのなら朝早く起きるなり、夜遅く走るなり、方法はいくらでもあったはずだ。

一年のブランクで走れなくなった自分を認めたくなくて作り上げたものは、理由という名の言い訳だった。

柊一はストレッチをしながら走っている瀬田の姿を眺め、ずっと自問を繰り返していた。

やがて三十分ほどしただろうか、戻ってきた瀬田は、さすがに疲労の色を浮かべて

「そろそろ引き上げて食事に行きましょうか」

と声をかけてきた。

頷いて立ち上がった柊一は、瀬田と一緒にロッカールームへ向かいながら

「それにしても、毎回あの店に連れて行ってもらって僕は嬉しいんですけど、瀬田さんはカレーばかりで飽きないんですか？」

「正直に言えば、最初の頃はこんな辛いだけの食べ物どころがいんだらうとおもっていたんですがね。村山さんと一緒に通っているうちに、だんだんとカレーの良さがわかってきましたよ。今じゃあ私も一日に一度はあの店のカレーを食べないと気が済まないんです」

瀬田は愉快そうな口ぶりで言った。

辛いだけって・・・思わず柊一は苦笑してしまう。インドのカレ
ー協会から訴えられちゃいますよ。

ただそういうことなら余計な気遣いをする必要もない。柊一はや
やこしい悩みはひとまず脇へ置いて今日はどのカレーを注文するか
考えることにした。もちろんカツカレーだ・・・のだけれど。

シャワーを浴びて服を着替え、競技場をあとにすると、眩い（ま
ばゆ）夏の日差しが降り注いできた。手をかざして空を見上げなが
ら、たまには大学に顔を出しても悪くないかな、と柊一は思った。

「瀬田さん」

と話しかけようとして、隣に誰もいないことに気付く。振り返る
と、瀬田は競技場を出てすぐの場所に立ち止っていた。なぜか狼狽
した表情でこちらの方をじっと見つめている。

どうしたんだろう、と訝いぶかしみながら瀬田の視線をたどっていくと、
その先には一人の少女が立っていた。高校生ぐらいだろうか、ノー
スリーブのワンピースを着た少女は睨むような目つきで瀬田を見つ
めていた。

しばらくして、瀬田は覚悟を決めた顔になり、ゆっくりと少女へ
近づいていった。

「久美子、どうしてここに？」

少女と向かい合つと、瀬田は機嫌を取るような笑みを浮かべた。

「気づかないと思った？おじいちゃんの体つきがどんどん引き締まっっていくんだよ。絶対何かしてると思っって探してたんだよ」

確かに瀬田の体つきは、走るためのそれになっていた。柊一にはむしろ美しいとさえ思える変化。それを久美子と呼ばれた少女は怒りを抑えているような口調で言う。おじいちゃん、ということは瀬田の孫娘なのだろうか。

「そうか気づかれていたんだな」

「・・・あれだけ止めたのに、聞いてくれなかつたんだね」

「いや、それは」

「お父さんもお母さんも私もみんな本気でおじいちゃんのことを心配してるのに、分かつてくれないの？」

久美子は潤んだ目で瀬田を見つめた。

困り果てた様子で立ち尽くす瀬田を見かねて、柊一は言葉を挟むことにした。

「この子は瀬田さんのお孫さんですか？」

「ええ、そうです。ご紹介しします、孫の久美子です」

瀬田は救われたように久美子から視線を逸らして言った。

「この人は？」

久美子は、まるで何かを品定めするような目つきで柊一を見ている。

「こちらは、私が色々お世話になっている村山さんだよ」

「お世話？」

「そう、親切に陸上を教えてくれたりな」

瀬田の言葉を聞いた途端、久美子は柊一を敵と断定したようできっと睨みつけてきた。

「悪いんですけど、もうそんな真似はやめてください。おじいちゃんのは体の具合悪くて、お医者から運動は止められているんです。もしおじいちゃんの身に何かあったら、あなたが責任を取ってくれるんですか？」

「えっ、いや、その・・・」

久美子のあまりの剣幕に、予想はしていたものの柊一はたじろいってしまった。

「こら、やめなさい！！村山さんは何も知らずに、ただ私の頼みを引き受けてくれただけなんだから」

瀬田は慌てて久美子を制すると、きまりが悪そうな顔を柊一に向けた。

「すみません、ご覧のとおりちょっとややこしいことになったので、今日のところは、これで失礼しても構いませんか？」

「ええ、どうぞどうぞ」

柊一は急いで頷いた。

その後、財布を取り出し食事代を手渡そうとする瀬田と、さすがに現金は受け取れないと拒む柊一の間でしばらく押し問答があったが、結局、また次回にカレーをご馳走してもらおうという約束で落ち着いた。その間、久美子の値踏みするような、怒りのこもった視線を感じていなければならなかった。

二人が去っていくと、柊一はほっと吐息を洩らした。思わぬ展開になったが、これで瀬田についての幾つかの疑問が解消されたような気がした。

瀬田が練習中に時折体調を悪くしていたのは、やはり何か重い持病を抱えていたせいだったのだ。それがどれだけ深刻な症状なのかは分からないが、医者に運動をとめられているという久美子の言葉からすると、かなりの危険を冒して走っていたのかもしれない。

お金がないから、ジムやクラブチームに通えない、という説明もやはり嘘だったようだ。そうした施設などで走るということ避けていたのは、口座への会費振り込みや自宅への事務連絡などを通じて家族に見つかってしまうことを危惧していたからに違いない。それに重い持病を抱えた身となれば、そもそも入ることさえ拒まれる可能性もある。

いずれにしても、こうして家族に見つかってしまった以上、瀬田

が陸上を続けるのは難しいかもしれない。恐らく今夜にでも家族会議が開かれて、二度と走らないようにとみんなから説得されることになるだろう。幾ら瀬田の意志が強いからといっても、孫や子供の懇願をはねつけられるとは思えなかった。

柊一としては、せつかくここまで一緒に頑張ってきたのだから、瀬田に最後までやり遂げさせてあげたかった。しかし、その一方でこれまで無事だったのは、運が良かったからで、場合によっては取り返しのつかない事態も起こり得たのだと考えると、久美子たちが懸命に止めようとする気持ちもよく分かった。

柊一は街をぶらつく気にもなれず、これからどうなるだろう、と考えながらまっすぐにアパートへ帰っていった。

翌日、いつも通りの時間に競技場に行ったが、どれだけ待っても瀬田は現れなかった。次の日も、その次の日も、やはり瀬田が姿を見せることはなかった。

予想していたこととはいえ、あまりにもあっけない幕切れに、柊一は自分が意外なほどに落胆していた。それでもいつか家族の隙を見て瀬田がやってくるのではないかと思い、毎日競技場に顔を出し続けた。ただ、以前のように一人で走っていても何か虚しいだけで、一時間も経たないうちに引き揚げることになった。こんなことになるのなら、せめて連絡先を聞いておくべきだった。瀬田の姿を見なくなったことを訝しんだ顔なじみのランナーたちが事情を尋ねてくることもあったが、詳しく説明する気にもなれず、適当に笑ってごまかすしかなかった。

今になって思えば、漫然とした日々を送る柊一にとって、競技場で瀬田を指導しているときだけが、唯一意味の見出せる充実した時

間になっていたのでろう。これで再び何の目的もない生活に戻るようになるのかと思うと、近頃忘れていた、あの陰鬱な気分が、あの恐怖が蘇ってくる。

瀬田が姿を見せなくなつて七日目になると、さすがにもうこれ以上待つていても無駄だろうというあきらめの境地になった。柊一は形だけ走り続け、すぐにロッカールームへ引き揚げる。

競技場を後にした柊一は、これからどこへ行こうかと迷つてから久しぶりにあおのカレー屋に足を運んでみることにした。今まで食べに行くのを我慢していたのは、決して自腹を切るのが嫌だったからではなく、瀬田と一緒にカレーを食べるといふ習慣を崩してしまふのがためらわれたからだ。しかし、こうなつてはもう我慢する必要もないだろう。

この日は、店の外に客が並んでいることもなく、すぐに入ることができた。

「あつ、きたきた」

柊一が一步店内に入ると、カウンターの途中で、いきなり店主が声を上げた。

何事かと思つて戸惑つていると、店主は急いでホールに出てきて

「君が現れたら、連絡をくれつて瀬田さんに頼まれてるんだよ。奥のテーブルでしばらく待つててくれるかな」

と告げた。

「あ、はい」

あれよ、あれよと柗一は店主に案内されて奥のテーブルに着くと
とになった。

店主が電話したところ、瀬田はすぐにこの店に向かうとのことだ
ったそうだ。

柗一は妙に落ち着かない気分で、サービスだ、と爽やか体育会系
スマイルの店主に出してもらったコーヒーを飲みながら瀬田の到着
を待った。

「やあ、やあ、お待ちせしました」

やがて瀬田が笑顔で現れた。

「お久しぶりです」

と柗一は挨拶を返してから、最後に顔を合せたときからまだ一週
間しか経っていないことに気づいて苦笑した。

「本当なら競技場の方へ行つて村山さんとお会いしたかったんで
すが、私があそこへ立ち寄ったことが万が一にも家族の耳に入れば
大変なことになるので」

瀬田はテーブルの向かいに座りながら、申し訳なさそうに言う。

「それで、ご家族との話し合いはどうなりましたか？」

「それがもう散々で。私が何を言おうと誰も聞く耳を持たないん

ですよ。とにかくもう走るの一点張りで」

「じゃあ、もう走らないんですか？」

「いえ、とんでもない。ここまできて諦められるものではありませんよ。どんなことがあるうともっと速く走れるようになってみせます。もちろん村山さんも引き続き協力してくださるでしょう？」

「そうですね・・・」

柊一は曖昧に頷いた、不思議なもので、あれだけ練習の再開を期待していたというのに、いざ瀬田の口からその意志を聞くと、むしろ身体への負担を心配する気持ちの方が強くなった。

「・・・まさか、指導するのが嫌になったとか？」

「というわけでもないんですが」

柊一は不安げな面持ちの瀬田を眺めながらしばらく考えて

「・・・瀬田さんは、どうしているんなら反対を押し切って、危険を冒してまで速く走れるようになりたいと思っただんです？」

と尋ねてみた。今更ながらの質問であるが、この際はつきりとした答えを聞いておきたかった。何が彼を動かすのか。もしその理由に命を危険にさらすほどの価値があるとは思えなかったときは、瀬田との仲がこじれることになったとしても、これ以上の指導はきっぱり断るつもりだった。

瀬田はしばらく迷うような素振りを見せていたが、やがて意を決

したように

「つまらない理由と思われるかもしれませんが、笑わないで聞いてやってください」

と言った。そして、さらに間を置いてから

「・・・私には小さい頃から、ずっと仲の良かった親友がおりましてね。名前は各務かがみと言います。各務と私にはこれといって共通点はなかったのですが、とにかく気が合った。さらに各務はとても足が速かった。将来を嘱望されたランナーでした。実は小さい頃から私は心臓が弱くてね。いつも各務が楽しそうに走っているのをただ羨ましく眺めていました」

と語り出した。

散り敷く落ち葉の絨毯、どこまでも続く山道、畦道、道という道を、私は自転車を漕いで各務は走って、それはそれは楽しかった。私の住んでいた地域は本当に自然に恵まれていた。夏には、アサガオ、アメリカデイコ、コンロンカ、ハイビスカスにサルスベリ。秋は紅葉。山々は錦に輝く。冬は真っ白な雪原に描く二人の軌跡。でも思うように走れなくて、二人して転んで何にも遮るものがない真っ白な空を見上げる。そして春になれば、こぶしの花が咲き誇る。各務と走った日々が、過ぎた季節の意味だった。

小学校でもその関係は変わらなかった。もちろん中学校に入ってから変わらなかったが、各務は陸上部に入ってしまった、私と走ることはなくなりました。少しさびしくもありましたが、私の心臓という装置は徐々にその機能を果たさなくなっていた。そして彼の走り私の自転車のスピードでは追いつけないくらいになってしまし

た。

「彼の走りは見るものを感動させる何かがあった、それはスピードだけではなく、人間としての強さだったのかもしれないと今になって思います。草原を駆ける豹のように颯爽と力強く、風のような軽やかさと一本の太木のような心強さが中学生の時点であつた。男の私から見てもかっこよかったのだから、女性にはもちろんのことでしょう」

瀬田の意図することが理解できない柊一は、ただ当惑するばかりだったが、寂しさを拭えない彼の口調に口を挟むことができなかつた。

「だから私は自分ができることを頑張りました。勉強だけは必死にやりましたね。お陰さまで、地元で一番の進学校に合格できました。そして各務はスポーツ推薦で早い時期からその学校に行くことが決まっていたので、彼は子供みたいにはしゃいで喜んでくれて、私もうれしかった」

「いい人だったんですね」

素直な感想だった。柊一は自分以外の幸せをそこまで喜ぶことはできない。

「そうですね・・・」

瀬田はそんな相槌を打ちながら、今まで見たことのないような底の見えないような悲しみを帯びた目をした。

ところが、私の心臓はその頃から悲鳴を上げ始めていました。も

はや学校どころではなく、入学早々入院生活を送ることになってしまった。それでも各務は毎日学校が終わると病院にお見舞いに来てくれて、学校の話、陸上の話、私を楽しませようと必死になってくれてそんな彼がおかしくて、とにかく笑いました。友達も連れてきてくれて、まるで学校にいるような気分でした。

私はいつか電池が切れるように終わってしまう命に怯えながらも同時に世界一の幸せを感じていました。だからこのまま死んでしまってもそれでいいのかもしれない。そう思えるくらい各務は私にいろんな世界を見せてくれた。そして発作の起こる間隔が短くなり、身体はもう限界に達していました。本当に死を覚悟した。そんな矢先です。ドナーが見つかったのは。

「それはよかったですね」

柊一は心から良かったと思った。

「ええ、それはもう家族全員で喜びました。各務にも早く知らせたかった。この足で各務と同じように走れるのかもしれない。一緒に走れるかもしれないのですから」

それなのに悲しみを湛えた笑顔に柊一は不安を覚える。

「手術のために私は別の病室に移され、絶対安静と言われ面会時間も制限されてしまいました。それに各務は大会があると聞いていたので、しばらくは誰とも会えないな、と少しさびしかったのですが、少しの辛抱です。耐えられなくなかった。手術間近になって、友達が見舞いに来てくれ、教えてくれました。各務は猫を助けようとして交通事故に合って死んでしまったと。私は崩れ落ちました」

グラスに入った氷が解けるカランという音が店内に響いた。

「それじゃあ……」

柊一はそれ以上、言葉が続かなかった。

「そうです。ドナーは各務だったのです。私はすぐに決断しました。移植手術は受けないと。家族は猛反対です。でも私は頑として譲らなかつた。赤の他人の心臓なら大丈夫というのもひどい話ですが、親友の死の上に成り立つ生命など受け入れられなくなかつた。でもそんな騒然とした病室に各務の母親が訪ねてきたんです」

思わず天を仰いだ瀬田が続ける。

「あの日を思い出すと、今も胸を締めつけられるんです」

「お願いします、お願いします、お願いします、お願いします……！！このままじゃ息子は本当に死んでしまいます！」

各務の母は床に顔がつくほどの土下座をし、溢れだした大粒の涙が流れ落ちる。

「でも……」

そう言う瀬田を遮るように各務の母は続けた。

「あの子の最後の願いを叶えてください！いつも瀬田の分まで走るんだと、あなたのことをいつも気にかけていた、あの子の分まで

生きてください！あの子の・・・あの子の願いを叶えてください。
お願いします、お願いします・・・」

もう各務が死んだと知らされたときに流しつくしたはずの涙が止めどなく流れる。この涙の一つ一つが言葉に変わってくれたらどれほどいいだろう。変わったとしても伝えきれない、この気持ち。そして伝えたい相手はもういない。

「だから、彼は私の中でまだ生きています」

そう言っつて、左胸に大事に手を当てる瀬田は、長い年月が経ったせいか、悲しみの中にも懐かしさが入り混じったような表情を浮かべている。

「そしてなぜかこの年になって、彼の心を感じるのです、走りたという。夢の中で一緒に走っているのです。でも彼にはあと一歩のところまで勝てない。その夢を見るたびに思うのです。速くなりた
いと」

「それが走り始めた理由ですか？」

「ええ、そうです。もちろん今から走ったとしても、各務のように速く走れるようになるわけではありません。それに私は心臓の病気を抱えています。でもこれは病気ではないと思います。なぜなら彼の強い心臓ですから。心臓の痛みは彼の思いです。その思いに応えたいのです」

瀬田はそこで一度言葉を切ると、ゆっくり吐息を洩らした。

「私はこれまで、彼の分まで生きるように精一杯生きてきました。歩んできた人生には成功も失敗もたくさんありましたが、全て生きていればこそ。経験できることが幸せでした。素晴らしい人生を送ることができたと思っております。そう、ついこの間までは、もう何も思い残すことなく迎えが来るのを待てると思っていたはずなんです。ところが各務のことを夢に見るようになってからは、それがどうにも心に引っかかってしまって。このままでは心安らかに最期を迎えることができなくなるじゃないかと、そんな不安から競技場へ足を運んだというわけです」

「なるほど、そういうわけだったんですか」

柘一は少し鼻を噉りながら頷いた。

瀬田はふと気恥ずかしそうな表情になると

「こんなことを打ち明けたのは村山さんが初めてですよ。……どうでしょう、今後もしも指導していただけますか？」

と言った。

「分かりました。また一緒に頑張りましょう」

柘一が頷くと、瀬田はほっとしたように笑みを浮かべた。

その翌日から、二人はさっそく練習を再開した。いつもの競技場だと瀬田の家族に見つかる可能性があるので、代々木八幡から九駅ほど先にある祖師谷大蔵の駅近くの競技場を使うことにした。砧公園に隣接するようにその競技場はある。本来なら、この競技場の方

が柊一の家からは近いのだが、瀬田のことと、高校生や中学生の陸上の大会でよく使用されていたので、どんな競技場かはよく知らなかった。

瀬田の健康状態については、それまで以上に気を配るようにした。少しでも疲労の色が見えたときには、すぐ休憩を取るように指示したし、いざというときに備えてかかりつけの病院の電話番号も聞き出しておいた。

前回の練習から少し間が空いていたので、初日は軽いジョグに留めておいた。そして次の日からは、いよいよインターバルやビルドアップを取り入れた練習に入る。この練習は設定タイムより遅く走ってしまったては意味がない。瀬田がペースを見失ってしまったら、柊一は少し後ろから激励しながら付きつきりで練習を指導した。

再び瀬田との練習の日々が始まると、柊一の生活にも変化が起きた。まずは補強からしっかりするようになった。ジョグの時間も増やし、それを朝、晩かかさずにやる。さらに瀬田が来る時間よりさらに早く来て、千メートル×五を設定タイムを二分五十秒で、とポイント練習もするようになったのだ。

感覚が高校生に戻るのにはかなりの時間がかかった。めげずに頑張れたのは、努力が形になる瞬間を瀬田に見せてもらったからだ。口の中には血の味が広がり、吐き気をもよおし、そのまま吐いてしまふこともしょっちゅうだったが、好きという気持ちを上回る苦しみはなかった。

感覚が戻っていくにつれ、柊一はポイント練習を週三日ほどに増やし、自分自身をさらに追い込んだ。もしかしたら自分の選手とし

ての限界は近いのかもしれない。ただもし瀬田のような情熱を持っていたら立ち止まることはないだろう。限界なら超えればいい。現実なら変えればいいのだから。

その間にも、瀬田はかすかではあるが、確実に成長していった。八月の半ばを過ぎる頃には一キロを三分二十秒台で走ることができるようになっていた。ただそのペースを維持するのは難しいようだったので、柊一は、それならば最初の二キロだけ我慢して、速めのペースで入り、そのあと三キロは十秒から二十秒落としてイーブンペースで踏ん張るように指示した。もちろん一人ではつらいだろうから、時には後ろから背中を押してあげたり、前に出て風よけになって引つ張ったり、柊一がペースメイクした。

つらいだろうに、瀬田は弱音も吐かず、必死に食らいついてくる。これだけは言える、走った距離は裏切らない。一步、また一步と、瀬田は維持できる距離を伸ばしていった。

そして、ついに点と点でしかなかった、今までの補強、ドリル、ペース走、インターバル、レペテンション、様々な練習が線で結ばれた。

いいフォームだ。無駄な動きも揺れもない。息は切れながらも、目はまっすぐ前を見つめ、いいリズムを刻んでいる。残り二百メートルを切り、瀬田は腕の振りをコンパクトにそれでいて力強くする。素晴らしいギアチェンジだ。最後の力を振り絞り、自分の限界を超えていく瀬田の姿が、走るということはこうということだと、柊一に教えている。瀬田がゴールする瞬間の武者震いは一生忘れない。

「やった、やりましたよ！！五千メートル十六分三十秒八八、マスターズでも十分通用するレベルです！！」

柊一は両腕を突き上げて叫んだ。

瀬田はしばらく呼吸を整えてから、

「ありがとうございます、これも全て村山さんのおかげです。本当にありがとうございます」

とお礼を繰り返した。晴れやかな表情の中で、微かに目が潤んでいるように見えた。

この日はカレー屋でいつもの食事をした後、さらに瀬田の行きつけの小料理屋に行って、夜遅くまで今日という日を祝った。いつもは酒を控えめに行っているという瀬田もお銚子を何本も空けて真っ赤に顔を染め、柊一も一切の屈託を忘れて賑やかに騒いだ。

やがて店主が暖簾を仕舞い始めた頃、柊一はカウンターの隣席に座っている瀬田に肩を寄せ

「今日走れた感覚を忘れないように、これからもがんばりましょうね。何かあったらいつでも連絡してください」

と言った。携帯電話の番号を記したメモはすでに渡してある。

「ありがとうございます。ですが、村山さんもこれから頑張らなければならぬことがあるでしょうし、もうあまり邪魔しないようにします」

「気づいていたんですか??」

「ええ、以前私も早めに競技場に行って練習しようとしたとき、

村山さんが練習している姿を見てしまって」

瀬田はそう言うてにっこり笑うと

「自分の練習もして、そのあとに私の練習にも付き合っていただいて、大変でしょう。今度は私が村山さんを応援する番ですね。といつても、私にできることといえば、あの店でカレーをご馳走することくらいでしょうから、食べたくなつたときはいつでも連絡してください」

そう言うて、手を差し伸べてきた、柊一も笑みを返すと、頑張ります、と応じて固い握手を交わした。

その数日後、柊一は陸上サークルに入ることにした。親戚練習会に一度参加したきりだったので、多少の気まずさはあったものの、柊一の本気の姿勢が伝わったのか、それとも気持ちの問題だったのか、すんなりと雰囲気馴染むことができた。

早稲田の陸上サークルは競走部を辞めてきた人もいるせいか、強い目的意識を持ったランナーが多い。そこで競い合う中で、柊一の走りがさらに磨かれていくのがわかった。

何度か瀬田に途中経過を報告しようかと思つたが、せめて少しでもしつかりとした記録が出るか、競走部に入ることができたからにしようと思ひなおす。あのカレー屋の味が恋しくなつても、いつかお祝いで連れて行つてもらう日がくるまで我慢することにした。

金木犀の香る季節が過ぎ、木枯らしが吹き始めた。

年の暮れが近づき、スピード重視の練習から長い距離を踏むこと

が多くなったある日のこと、久しぶりにスピード練習をするために柘一は代々木八幡の陸上競技場に来ていた。

軽いウォーミングアップのあとにストレッチを済ませ、そろそろ本練習に入ろうと腰を浮かせた柘一は、ふいに誰かに呼び止められた。振り返ると、そこには見覚えのある少女が立っていた。少し記憶を探ってから、それが久美子だったことを思い出す。

「あつどもも。おじいさんは元気にしていますか？またそのうち挨拶に行こうと思ってたんですけど」

愛想良く話しかける柘一に対して、久美子は口をきつく結び、挑戦するような目つきで黙っている。

初めて会った頃を思い出し、思わず怯んでしまう。

やっと口を開いたと思ったら、その言葉に耳を疑った。

「おじいちゃんは今半月前に亡くなりました」

久美子は目を潤ませ、ぼつりと答える。

「そんな・・・」

柘一は呆然として宙を見つめた。最後に会ったときの酔いに顔を染めて満面の笑みを浮かべる瀬田の姿が脳裏に浮かぶ。あんなに元気だったではないか。

「本当に急なことだったんです。ちょっと風邪をこじらせて入院することになったときは、一週間もすれば元気になって退院できる

だろつって話だったんで。だから、余計な心配をかけないように村山さんには連絡しなかったんです」

「……」

口は動いているはずなのに言葉が出てこない。あまりに突然のことで涙腺のない魚のように泣くこともできない。

「夜中に急に容態が変化して意識不明になって、そのまま目を覚まさずに亡くなってしまつて……」

久美子はそう言つてから、ふと思ひ出したように、

「あ、でも一つだけ」

柊一は知らぬ間にうつむいていた顔を上げた。

「おじいちゃん意識がなくなる二日くらい前だったんですけど、私がお見舞いに行くとおじいちゃんは昼寝をしてたんです。熱のせいがいつもは寝苦しそうにしてたのに、そのときだけはなぜかとても気持ちよさそうな寝顔を浮かべていて、不思議だったんですよ。それで、後で目を覚ましたときに、いい夢でも見てたのって聞いたら、各務に届いたつて嬉しそうに言つんです。それがどういう意味か尋ねる前に面会時間が終わっちゃったんで、結局聞けず仕舞いになったんですけど、今度村山さんにお礼を言わないと、っておじいちゃんが呟いていました」

「そうですか……」

柊一は灰色に曇つた空を見上げた。

そうか、各務さんに届いたのか。きつと瀬田は何も思い残すことなく、晴れやかな気分になっていたに違いない。そう考えると、悲しみの中にも安堵の思いが生まれてくる。

「村山さんはなぜそう言ったのかわかるんですか？それなら私にも教えてください」

「ええ、よくわかりますよ。ちょっと長い話しになるので、どこかその辺の喫茶店にでも入って・・・あっその前に練習を終えてからでも構いませんか？」

「あ、はい、大丈夫です。お願いします」

久美子は急いで頷いた。

今日の本練は二百×十のインターバル。二百メートルのスタートラインへ向かう。仄かに雲間から光が射した。

瀬田さん・・・と柊一は心の中で呟く。今度は僕の番です。あなたの分まで、僕が走ります。あなたのように悔いのない人生を僕は送っていません。思い出と呼べる記憶なんてない。ただそんな苦い過去が思い出として燦然とそこで輝いているわけではなかったとしても、今の自分に確かに続いて来ていると、あなたのおかげで思えます。

この思いが、この胸の高鳴りが情熱でありますように。

柊一は二人のランナーの思いを胸に新しいスタートラインを踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0297ba/>

新しいスタートラインに立つ者は皆孤独

2011年12月31日18時53分発行